

.....
書 評
.....

CALOGERO ALLEGRO : *G. Scoto Eriugena. I. Fede e Ragione ; II. Antropologia.*

Città nuova editrice, Roma, 1974, 1976, pp. 467, 218

R. L. シロニス

イタリア人の若い哲学教授が世に出したこの二巻の書物は、中世の哲学者スコトウス・エリウゲナの思想の二つの中心テーマをあますところなくかつ深く掘り下げて研究したものである。その二つのテーマとは、信仰と理性との関係と、人間論である。第一巻では信仰と理性との関係が様々な観点から論じられている。著者はこの関係を明らかにするために、神学と哲学の意味、それらの相互関係、信仰と理性の意味、それらの相互関係、自然と信仰との関係、権威の価値等について論じる。第一巻できわめて顕著に現われ、堅固な証明をあげて確かめられている考えは、この点でギリシア教父とラテン教父によって伝えられた教えを継承しているエリウゲナの著作全体に見られる、信仰と理性の緊密な統一である。信仰と理性の統一は、エリウゲナのもとで、宗教と哲学の統一を意味する。彼は「真の宗教は真の哲学である」というアウグスティヌスの言葉を引用している。彼の考えによると哲学は、万物の最高原因である神を謙虚にかつ合理的に探究することによって真の宗教を説明するものにはかならない。このために真の哲学は、真の宗教と同じく、英知であり敬神である。エリウゲナは絶えず聖書と教父たちの言葉に依拠しながら自分の教えを説いている。教父たちのうちでも特にニッサのグレゴリウス、アウグスティヌス、マキシムスの言葉をあげている。したがって彼は、自分で考え出した教えを述べようとしているのではなく、中世の神学者たちと同じく、聖書に含まれ、教父たちによって解釈され伝えられた信仰の内容を理解し説明しようとしたのである。

著者はエリウゲナのもとでの信仰の意味と理性の意味を、明らかにかつ深く掘り下げて説明している。それらの意味を正確に理解することは、信仰と理性の統一と

いう意味を正しく理解するために必要である。信仰に関しては、エリウゲナはアウグスティヌスに従って、*simplicitas fidei* (単純な信仰) と *fides perfecta* (完全な信仰) という二様の信仰を考察している。後者は前者を前提している。万物の原因である神を理解して完全な信仰を得るためには、*simplicitas fidei* から始めなければならない。この *simplicitas fidei* は、神の権威であるところの聖書の権威に対する従順である。人が *simplicitas fidei* から始めて、受けつがれた信仰を理解することを求めるなら、彼は神の恩恵に助けられて、「最高の熟視」(*altissima theoria*) とか神学 (*theologia*) とか呼ばれる完全な信仰に至ることができる。エリウゲナにとって神学は、万物の原因である神の観想でもある。どちらの信仰も理性と一致しており、決して理性に反対しない。エリウゲナのもとでの理性の意味については、いくらか説明する必要がある。エリウゲナはマキシムスに従って、精神の三つの働き (*motus*) を区別している。それは、*intellectus* (知性) あるいは *mens*(霊), *ratio* (理性), *sensus internus* (内的感覚) である。知性は最高の働きであり、概念の助けを借りないで識られざる神を把握する直観的な働きである。次に来るのは理性で、これは起原的原因 (*causae primordiales*) や事物の本性を認識し、概念によって識られざる神を規定する働きである。第三の働きの対象は感覚的事物である。したがって、理性は知性とは区別されるし、また神的で永遠なものを観想するから英知であり、類と種に分けられた事物の本性を取り扱うから知識でもある。精神のこの三つの働きは、上位の働きから下位の働きへの下降と、反対に下位の働きから上位の働きへの上昇が、精神の中に存在するほど緊密に結ばれている。理性は知性から生まれ、知性の有形的表現である。したがって、理性による神認識は、*intellectus* と呼ばれる働きの影響を受けて生まれる。知性によって照らされた理性は、起原的原因から *theophaniae* (神現) と呼ばれる観念 (*cognitiones*) を受け取ることができ、その観念によって神を認識することができる。神現によって神をこのように認識することは、神の恩恵に助けられて、自然を越える働きであると言われる知性に照らされて行なわれる。本書の著者によると、エリウゲナの認識論において理性は信仰を持っていなければ、感覚的なデータから出発して神の認識に至ることはできない。著者があげている理由は、エリウゲナによると、理性は神の恩恵に助けられなければ、感覚界を越えて知性的世界にはいることができないということ

である。したがって、内的感覚から知性によって神と一致するに至るまでの上昇は、次のようにして起こる。理性は内的感覚から送られる感覚的事物の認識を受け取り、これらの事物を通して、あたかも神現を通してでもあるかのように、信仰を介して、神の認識まで上昇しうる。この信仰は、知性によって完成され得、こうして完全な信仰となりうる。したがって、エリウゲナのもとの理性と信仰の統一は、信仰が理性の段階まで下降することを意味しない。恩恵の力により、信仰を介して、自然のうえに上げられる知性に照らされて初めて、理性は神をある程度認識するに至るのである。換言すれば、エリウゲナによると、神と直接に結ばれている知性に理性が統一されることによって、人間は信仰の知解に達しうるのである。

著者はさらに、ディオニシウスがエリウゲナに及ぼした影響と神現とに一章ずつをあてて論じている。実にエリウゲナは、ディオニシウスから受けた教えに従って神現を取り扱っているのである。神現を取り扱った章は、エリウゲナのもとの信仰と理性との統一の意味を正しく理解するためにきわめて適切なものであると私は思う。というのは、エリウゲナによると、ディオニシウスが言っているように、聖書の象徴も他のすべての自然的被造物も神現であるからである。ここで神現とは、神との一種の類似により、万物の原因である神をある程度示している像のことである。したがって聖書を対象として持つ信仰も、自然的事物の本性を対象として持つ理性も、これらの像によって神について思いめぐらすことができるのである。したがって信仰と理性は対立するのではなく、神を認識するために協力するのである。識られざる神のこの認識は、逆説的な認識である。実にエリウゲナは教父たち、特にアウグスティヌスとディオニシウスに従いながら、神現によって人は認識して認識せず、見いだして見いださないと主張しているのである。神は自分のすべての神現を越えており、決してそれらの神現の中で完全には把握されうるものではないのである。

権威に関しては、エリウゲナのもとの権威への服従が盲目的なものではないことを著者は指摘している。エリウゲナは教父たちの権威に言及しながら、真理を見いだすためには、権威と理性を利用しなければならないと言う。権威とは、理性によって発見され、教父たちの書物の中にたくわえられた真理にほかならない。エリウゲナが語っている理性は、全く独立した理性ではなく、すべてにおいて真理を求め、見いだす、真の正しい理性である。

著者は第二巻で、エリウゲナの人間論を取り扱っている。この人間論では、エリウゲナの著作において理性と信仰は分離されず、かえって統一されているという、著者が第一巻で主張したことが確認されている。エリウゲナの人間論はその基本的主張を信仰から、すなわち聖書が人間について述べていることから、汲み取っている。他方でエリウゲナは、信仰が人間について教えていることを、理性の厳密な論証によって知解しようとしている。彼の人間論の中心にある、人間は神の像であるという考えは、聖書とニッサのグレゴリウスの著作“De Imagine”（『神の像について』）から取られている。このために、人間はきわめて大きな尊厳と卓越性を有している。人間は逆説的なものでもある。すなわち、物質界全体はある意味で人間の中に含まれていると同時に、人間によって超越されている。人間は動物であると同時に霊的なものであり、一時的な消えやすいものの方へ引かれていると同時に、神の方へも引かれている。エリウゲナは、神についてすべてのことが肯定されるとともに否定される（たとえば神は真理であるとも、神は真理でないとも言われうる）のと同じく、人間についても多くのことが肯定されるとともに否定されうる（たとえば人間は動物であるとも、動物でないとも言われうる）と言っている。エリウゲナによると、人間は他のすべての被造物と同じく、「永遠に造られた神的精神の中にある一種の知性的観念である」。すなわち、人間は起原的原因の中に永遠に存在するのである。しかし人間は時間のうちに造られたものであり、知性にほかならないとも言われている。人間の本質は、「真理を観想することを特徴とする知性である」。エリウゲナはアウグスティヌスに従って、人間の知性の中に三位一体の像が現われると言う。また神について言われるように知性についても、人はそれが有するというを知りうると言われるが、それが何であるかを知ることはできないと言われる。知性はあらゆるものを越えるのである。人間は罪を犯した後でも、神の像であるとエリウゲナは主張する。しかし罪の後ではこの像はくもらされ汚されており、したがって神の像の元の尊厳に帰るためには、清められなければならない。この元の尊厳に帰るのは可能なことである。なぜなら、罪の後でも人間の中に失われた幸福に対する渴望が残っており、そのために人は神を忘れることなく、神を求めるからである。この帰ること（recursus）は、肉体の死、肉体の復活、肉体的人間から霊的人間への移行、起原的原因への帰還、万物の神における活動

(motus) という五段階で行なわれる。最後の段階は、「聖徒らに約束された楽園である」神における、キリストとともに生命を通しての、人間の神化である。著者によると、エリウゲナは『自然区分論』という著書の最後の部分で、人間の自然が、罪を犯した後でも、神によって造られたものであるから善いものであるということを強調している。神が造らなかった罪のみが悪いのである。罪とは、霊的なものから離れて感覚的事物の悦楽に陥る人間の意志行為である。したがって、万物が神に帰るとき、人間の自然全体が神のもとに帰るであろう。そしてその帰還後にもある意味でとどまる非理性的な動きのみが、神の造らなかった悪として、神より永遠に遠ざけられ罰せられるであろう。この最後の点はきわめて不明瞭な点で、エリウゲナが全力をあげて論証全体を通して説明しようとしたが、それでもなおあいまいなままになっている。エリウゲナの教えの中で、彼が聖書と教父たちの教えに合わせようとしたにもかかわらず合わせることができなかった他の一つの点は、性についての教えである。人間における性の区別は罪から来るのであって、人間は罪を犯す前には天使に似た者であり、霊的な肉体を持っていたと彼は主張する。

本書の長所は、エリウゲナのすべての著作から多くのテキストが引用されており、それによってエリウゲナの教えについての著者の解釈の客観性を確認しようということである。他の長所は、エリウゲナの教えに対する教父たちの影響を著者が示しているということである。事実著者はエリウゲナの教えを説明する際に、エリウゲナが教父たちから汲み取った点を指摘し、ときには教父たちの文章とエリウゲナのそれとを比較している。ここから、エリウゲナの著作の特徴と、それが中世において占めている場とが明らかになる。エリウゲナはキリスト教の精神と教えから逸脱した哲学者ではなく、反対に教父たちの教え、特にアウグスティヌスとディオニシウスの教えを継承しているのである。他方エリウゲナは次の点でスコラ学の大先駆者のようであると言える。それは、ある教義についての教父たちの様々の文章を熟考し、いっそう理にかなっていると思われる文章を選んでいるという点、論理すなわち理性の厳密な論証を使っているという点、教義のある体系を作ろうとしている、あるいは教義の秩序ある統合を行なおうとしているという点である。これらすべてのことは、著者が本書の二つの巻で行なっているエリウゲナの著作の分析から明らかである。著者はさらに、上述した不明瞭であいまいないくつかの点を指摘し

ているが、エリウゲナがいつも明せきな調和に達したとは言えないにしても、聖書と教父たちの教えから逸脱しようとしたことは全くなかったことを確信している。著者はエリウゲナの生涯についての話をその教えについての論述の前に載せることにより、エリウゲナの著作についてよりよく判断しうるように、その学問的環境と歴史的背景を示している。 (熊谷賢二訳)

G. R. Evans : *Anselm and Talking about God*

Clarendon Press, Oxford 1978

pp. xii+211

Anselm and a New Generation

Clarendon Press, Oxford 1980

pp. xvii+212

山 崎 裕 子

神について語ることは、中世の思想家にとって共通の主題であったが、なかでもアンセルムスは、殆んど全ての著作が神を直接・間接の対象とする点で、異彩を放つ。ここで取り上げる二著作は、著者の第一作及び第二作であり、前書は、神について語ることをアンセルムス自身の著作の範囲内で考察し、後書は、アンセルムスの神の捉え方を12世紀の思想家と比較するという形を取る。著者エヴァンズは、現在、ブリストル大学神学部講師であり、本誌22号(1980)で泉治典氏が触れておられるように(p.209)、国際アンセルムス学会事務局長を務めている。

*

Anselm and Talking about God は、アンセルムスが神についてどのように語っているかを、著作の年代順に検討している。その際、著者が、「神について語ることは、アンセルムスにとって出発点であり、到達点ではない」(p.204)と解することから、後の作品に題材を供するという点で、処女作『モノロギオン』の分析は、大きな役割を果たす。本書の基調は、『モノロギオン』に関する考察が筆頭に位置することによって決定づけられていると言えよう。